（様式１）【ホームページ掲載用】

研究課題（テーマ）	包括的なケアコミュニケーション技術教育の効果に関する追跡調査 ～本看護学部を卒業した新人看護師を対象として～		
研　究　者	所　属　学　科　等	職	氏　　名
代表者	看護学部看護学科	准教授	青柳　寿弥
分担者	看護学部看護学科 看護学部看護学科	助教 教授	米山　真理 岡本　恵里

研究結果の概要

【背景・目的】看護基礎教育において、知覚・感情・言語による包括的コミュニケーションに基づくケア技法を修得することが重要と考え、本学では４年間を通してユマニチュード®の哲学やケア技法を組み込んだ科目「看護ケアとユマニチュード」を系統的に学べる教育プログラムを導入した。本研究は、このプログラムを学修した卒業生のうち、臨床で患者とのコミュニケーションを図っている新人看護師を対象に、その実践内容を明らかにすることにより、教育効果と課題を見出すことを目指した。

【方法】本学を卒業しＡ総合病院に就職した新人看護師を対象に、就職６か月後の時期に、学生時代に学修した「看護ケアとユマニチュード」を活用した入院患者とのコミュニケーション実践内容についてフォーカスグループインタビューを実施した。語られた内容は逐語録を作成し、質的帰納的に分析を行った。

【倫理的配慮】対象者に研究の趣旨、参加の任意性、個人情報の保護、研究成果の公表等について文書と口頭で説明し、同意書に署名を受けた。富山県立大学「人を対象とする研究」倫理審査部会の承認を得て実施した（看護第 R5-12）。

【結果】22 名を対象に 3～5 名の 5 グループに分けてグループインタビューを実施した。語られた内容は、115 コード、31 サブカテゴリー、9 カテゴリーに分類した。カテゴリーは、ユマニチュード技術である訪室時のノック、前向きな言葉を選んで使う、患者の腕や足首を上から掴まず手掌全面を使うことを徹底するなど＜五感を使って患者の反応をキャッチする＞、＜患者を掴まないように心がけて触れる＞、＜患者の行動意欲を引き出すよう関わる＞等の５つを見出した。残りの４カテゴリーは自己課題を含む＜患者の意思より治療と安全を優先する＞、＜経験や知識の乏しさから対応がわからない＞等であった。

【考察】新人看護師は、既習の“見る・話す・触れるケア技術”を包括的に用いることで、患者の“視覚・聴覚・触覚”などの感覚器にポジティブな刺激を与えることを自然と実践していた。また、それにより患者の反応をキャッチし、行動意欲を引き出す援助に繋がっていた。一方、新人看護師ゆえの経験や知識の乏しさなどから、自由や安楽より安全を重視した抑制に関する行為に自己課題を抱いていた。本結果より、新人看護師に対して、ユマニチュードを取り入れた実践方法などを継続的に学ぶ機会を提供する必要性が示唆された。

上記について第 44 回日本看護科学学会学術集会で発表し、知見について意見交換を行った。

今後の展開

本研究で対象とした看護師には、就職１年後にもインタビュー調査を実施しており、2 つの時期のデータ比較に基づき分析を深める。これらの知見について、論文投稿にて公表する予定である。